

小田実全集（評論 第18巻）

才モ二太平記



講談社

小田実全集

Makoto Oda





目次

|                             |     |
|-----------------------------|-----|
| カラフトのオモニたち                  | 7   |
| ヤクジヤと思想家 <sup>ササンガ</sup>    | 17  |
| 「オモニ語」と「アボジ語」               | 29  |
| キミガヨ丸とクンデワン                 | 39  |
| ウニ首相の妓生遊 <sup>キセンノリ</sup> び | 51  |
| おたがい、がんばったな                 | 59  |
| 「ゲリー・クーバー」の「朝鮮」             | 68  |
| 「日本海」と「東海 <sup>トシヘ</sup> 」  | 78  |
| ご飯はマラソ食べるんや                 | 86  |
| もうそんなにうらめへんねん               | 93  |
| 宝島シマネケン                     | 102 |
| 「明治の人」                      | 111 |
| 二つの年号                       | 120 |
| 学士会館の「生きた化石」とオモニ            | 129 |

オモニの「洋来」——オダさん、ほんまにウソつきや

「フランスは雪やつた」、あるいは「お金より儲けや」

「サムシンのおばあさん」と「ソウル」

オモニの「ベルリン日記」

「わたしも来るがな」

おたがいの「くに」の話

オモニが帰りたい日本

死出の旅装束

神様、シンドイケドガンバツテクダサイ

オモニは二軒の家持ち

「チヨクボ族譜」騒ぎ

「ヘバン解放」おばあさんの来訪

「南北統一」忘年会

ならの「ばんや」

文庫版のためのあとがき

才  
モ  
二  
太  
平  
記



## カラフトのオモニたち

カラフト、いや、サハリンに行ったら、オモニが何人、何十人、何百人いるのにおどろいた。サハリンの首都ユージノサハリンスク、昔は豊原とよはらと言ったそうだが、そのバザール、つまり、市場に行くとき、いるわいるわ、オモニがズラリと並んで、キムチを売り、トマトを売り、花を売っている。みんな年をとったオモニで、そろって洋服を着ていたが、今ははやらぬ日本語を使って言えば、日本のおばあさんが\*アツパツパを身にまとうてズラリと並んでいるように見えた。なかにはそれこそ日本のおばあさん、おばさんが昔よくやつたように手拭いでアネさんかぶりに髪おほの毛を覆おほっていたりするのがある。

わたしはかなり年をとった人間だから(当年とつて五十有余歳。「人生五十年」とすればもうとつくの昔に死んでいてもいい年だ。いや、一世の文豪夏目漱石などは、たしかにわたしの年齢ではもう死んでいた)、そういうアツパツパ、アネさんかぶりのオモニたちを見ていて、まず思い出したのは、わたしの母親のことである。彼女ももうとつくの昔に死んでいるが、生まれたのは明治三十数年のことであつて、まぢがいなく「明治の女」。たしかに彼女のアツパツパ、アネさんかぶりの姿もしばらく私の眼に浮かんで来ていた。彼女の晩年、いつのころからか、わたしは母親のことを「おばあちゃん」と言いならわすようになっていたのだが、「おばあちゃん、元気か」とそのころよくやつていたような挨拶あいさつをわ

たしはいつのまにか、まぶた瞼のなかの母親と眼前の花売りおばあさん、いや、キムチ売りおばあさんの姿に二重うつしさせるようにしてやっていた。

しかし、わたしの亡き母親の連想は長くつづかなかつた。そこはおばあさんたちはさすがに朝鮮人、何やら彼女たちのことばでわめきたてるのを耳にすると同時に連想はただちにもうひとりのべつ「明治の女」、アッパツパ、アネさんかぶりの女性のほうにむかつていた。

「この日本イルボン人の奥さん、朝鮮人だね。」

バザールまで連れて来てくれたキム金さん、キムチ売りのおばあさんがさし出したキムチの一片をすばやく口のなかにほうり入れながら言った。わたしもわたしで口にほうり入れる。うまい——と言いたいが、トーガラスが不足しているのか、ただめつぼう塩からい。まあ、しかし、ありがとう、カムサハムニダ。

キムチおばあさんにしろ、列のまえを素通りして来た花売りおばあさんにしろ、みんな日焼けしている。一日じゅう、露店の市場に立っているのだから無理もないが、そのなかでもつとも日焼けしたおばあさんのまえにわたしと金さんは立っていた。

おばあさんは金さんのことばにまずおどろいたようだった。「まさか」というような顔をアネさんかぶりの下でする。ほんとだよ——というぐあいにはうなづく。とたんにおばあさんは、さつきから愛想よかつたのだが、とびきり親愛の情を示すように大口をあけて笑い出していた。日焼けした顔に歯ならびの白がきれいにのぞく。丈夫な歯を持ったおばあさんだ。おおかた自分のつくったキムチを精出して食っているからだろう。



「子どもがいるよ。」

わたしは言った。

「いくつ。」

「四歳半。」

「じゃあ、ヨメさん、若いな。」

(孫のまちがいじゃないか) という目でおばあさんはわたしをジロジロ見た。

「若くもないが。……」

わたしは話題を変えた。

「ヨメさんのオモニはあんたより年とっているよ。」

「いくつ。」

「もう八十歳や。チエージュド 濟州島の生まれで、まず大阪に来て、それから神戸。……」

日焼けおばあさんはいっそう相好を崩した。

「うちも大阪にいたんや。大阪からな、終戦のちよつとまえにな、ここにけ来えへんかいいう話があつて、……弟がいはつたんや、それで来て、そのままや。大阪は今どないになつとる。」

「どないになつとる」と言われても答えられるわけではない、ことばの問題ではない。いつのまにか最初下手に朝鮮語でしゃべっていたのが日本語になっていた。ありがたいことに、わたしの下手クソな朝鮮語にうんざりしたのか、日焼けおばあさんのほうが日本語を思い出し思い出ししゃべり出していたのだ。こつちも渡りに舟と日本語になる。それも私が生まれ育ち、日焼けおばあさんがかつて住ん

でいたという大阪のことばだ。二人とも自然にそのことばでしゃべっていた。おばあさんもつかえつかえしながらしゃべったが、つかえないときはうまいものだ。そして、もちろん、朝鮮語がなかに入る。どうかすると、それが半分ほどになる。つまり、日本語と朝鮮語双方のチャンポンでしゃべっている。急にわたしのつれあいの、いや、つれあいのことをわたしは「人生の同行者」という舌を噛みそな言い方で言うことにしているのだが、老オモニのことがなつかしくなつて来たのは、眼前の日焼けしたおばあさんの顔がなんとなくわが老オモニの顔に似ているのにつけ加えて（厳密に言うと、顔かたちはまったく似ていないのだ。それでいてふしぎに二人のおばあさんの顔は似ていた）、その日本語、朝鮮語のチャンポン語がまったく老オモニのものであつたからだ。

「子どもは何人？」

わたしは訊ねていた。

「五人。もう、みんな大きいで。」

いちばん上が運転手で、次が学校の先生で、その次が百姓で……というぐあいに彼女は言ったが、わたしはよくおぼえていない。

「孫は？……」

途中でさえぎるようにして訊ねたが、答えは、

「十人。」

これはわが老オモニの場合と合致している。そのむね言うと、キムチおばあさんはまたニコニコした。わが老オモニの子どもは、末娘のわたしの「人生の同行者」を入れて七人、すべて女ばかりだ。

「あなたのナムピョンは……」

とわたしもチャンボン語を口にした。ナムピョンはつれあい、「人生の同行者」のことである。「孫の世話をしているよ。」

それから、もうだいたいぶモーロクしてしまったとか、何も仕事しないとかブツブツ、愚痴まじりの話がつづいたが、判つたのは、百姓の三男だかがキムチの原料となる白菜やらキュウリやら、あるいはトマトやらをつくり、それを彼女がキムチに仕立てあげて、いや、トマトはもちろん生のままでが市場に持つて来て売っているとのことであった。ついでに言っておくと、トマトは昔、カラフト時代にはサハリンではできなかった。いや、白菜もそうだったのではないか。

「この人ら、こう見えてもお金持ちだ。」

金さんが横から口を出した。出番をさつきから待っていたような言い方だったので、少しおかしかった。皮肉げでもあれば、心もちうらやましがっている感じも声のひびきにはある。彼が説明してくれた。

まず、「この人ら」には、ソビエト政府は社会主義国だから、年金がたつぷりあつて不安なくくらせるようになってる。もちろんその額を「おたくの国日本」のお金の額に換算すると「スズメの涙」になるが、そういう換算はだいたいが無意味である。ここにくらしの水準から言うと、なかなかの金額で、彼女のと彼女の「人生の同行者」の分とを足すと、たつぷりしたものになる。その上で、こうやってキムチ売りをしてひと儲けしている。このキムチ、こう見えてもなかなか値のはるしろもので、サハリンに山といる（三万五千人だが、いるそうだ）カレンスキー朝鮮人はよく文句を言っているそうだ。バザールの露店市場で、アツパツパにアネさんかぶりというたいして見ばえのしないかっこうでキムチ

を売っているとなんとなく憐れ<sup>あわ</sup>げだが、そう見えるものだが、内実はどうしてどうして、ただの新聞記者の金さんなどよりはるかに金持ちだ。さっきの彼のことばにあつた「こう見えても」の意味はそういうものだが、そうわたしに合点できたが、金さんは新聞記者だけに消息通で、このおばあさんたちは、子どもはみんなソビエト国籍をとつてレッキとしたソビエト人になつてゐるのに、頑としてソビエト国籍をとらないでゐる。つまり、今は「無国籍」ということになつてゐるのだが、それはひとえに生まれ故郷の朝鮮——その南半分の韓国にいつか帰りたいからだ。三万五千人の朝鮮人<sup>カレンスキー</sup>（と金さんはロシア語で自分たちのことを言った。韓国やら「北朝鮮」やらでことがややこしいので、そうロシア語を使つたのかも知れない）の大半は、南半分の出身であることは、これは金さんに聞かずとも、わたしは知つてゐた。

「帰つたつていいけど、しかしですな。……」

と金さんはしかつめらしく言った。

「帰つたとたんに、黙つて年金をくれていたソビエトのほうがよくしといひ出すかも知れませんよ。韓国政府が年金を出すはずはないから。……」

とどのつまり、「反共法」にでもひつかかつて、おばあさんたちローヤに入ることになるかも知れない。あるいは——。

「また、この人ら、こつちのほうがよくつたと帰つて来るかも知れませんな。ええことやつてくれるところがわたしらえらいさんでない人間にはいちばんええんですからな。こつちがあかんとなつたら、また出ていく。そういうのがほんとはいちばんええかも知れませんな。」

金さんはなかなか達観したことを言った。こういう達観したことを言えるようになったのが「ペレストロイカ」の「ペレストロイカ」たるゆえんなのかも知れない。現実には、もちろん、なかなかことはそうなっていないのだが、いつかはそういう事態になる——と信じているようなひびきごとばのうらにあつた。

金さんは、地元の朝鮮語の新聞社の記者だ。わたしが新聞社を訪ねると、出て来たのが彼だった。あれこれこの地の朝鮮人たちの話を聞いているうちに、それじゃあ、案内してあげましょうということになった。

「どこへ行きますか。」

と彼は日本語で訊ねて来た。考えてみると、彼ははじめは朝鮮語でしゃべっていたのだ。その朝鮮語を編集長が日本語になおすというやつかいなことをやって来た。どちらもご年配なので、昔ならいおぼえた、いや、ならいおぼえさせられた日本語ができるのである。それにしても、はじめ彼は日本語をしゃべらず、編集長に通訳をやらせていた。

「バザール」へでも行ってみたい、と思っている——とわたしは言い、「そんなら、ポクが案内してあげよう」ということになった。金さんの日本語は上手で何のよどみもなくしゃべったが、ただ、「ポク」はちよつと気になったが、それもお愛敬<sup>あいぎやう</sup>である。

みちみち、いろんな話をした。わたしの「人生の同行者」が朝鮮人であることもしゃべった。「南北分裂」が彼女の家族にも及んでいて、両親は「南」の韓国に所属し、彼女をふくめて彼らの七人の娘（よく女ばかりできたものだ）は「南」「北」それぞれに分かれている——というような話もしやべ

りついでに出ていた。「フム、フム」と金さんはうなずいた。「バザール」へ入りがけに、「ここのおばあさんら、日本人がなつかしいのでしょうな。日本人が来ると、キムチなんかタダでいくらでもくれますよ」と事実をそのまま述べているのだというふうな口調でそそくさと言った。

実際、五人の子どもと十人の孫、グウタラで何もしないナムピョンを持つ日焼けおばあさんはわたしにキムチをくれかかっていて。ビニール袋にたんまり入れて持って行け、という。金さんのほうにも、わたしの分の半分がとこを入れた袋をつくつて、「ハイ、どうぞ」。これは日本語で言った。

ことわつてもラチがあきそうにないのでありがたく頂戴することにしたが（ホテルへ帰つて、ポソボソ食っている自分の姿が眼に浮かんで来ていた。そして、それは実際にそうだった）、お礼に持参していたカメラでおばあさんの写真を撮ることにした。

とたんに慌あわてて身じまいを正しだす。まわりの店のおばあさんたち、ガヤガヤ、冷やかし半分に騒ぎ立てる。ついでにまわりのおばさんにも来てもらつて、彼女ひとりのと、彼女を中心にして二、三人のと何枚か撮つた。

そのあいだにも、問答あり。今度は彼女をふくめて、その二、三人との問答である。日本語、朝鮮語チャンポン語での問答である。

「アンタのヨメさんのオモニ、朝鮮はどこから来た？」

「チエージュド。  
「済州島。」

「チエージュド。  
「済州島か。うちは全羅道や。」

「キョンサンナムド。  
「うちは慶尚南道。」

「アボジは……。」

「同じとこや。」

「<sup>イルボン</sup>日本で何していはつたんや。」

「まあ、何していたんやろ。」

土方、行商転じて闇屋、それからクツの製造、販売……といろいろことばが浮かんで来たが、面倒くさいのでことばを濁した。<sup>にじ</sup>オモコのほうのも、ついでに頭に浮かんで来た。海女<sup>あま</sup>である。まず海女のところの子守り。それから海女。もつともそれはまだ済州島にいたころの話だ。アボジといっしょに、それとも追いかけてだったか、日本に来てからは、行商。卵売り、どこからどう仕入れて来たのか、埼玉のメイセンを売ったりした。そんな話をいつか聞いていた。

問答がすんで、それでは日本<sup>イルボン</sup>に帰ってから、この写真送ってあげる、住所と名前を書いてくれとわたしは言い出した。それからひと騒ぎになった。誰も文字が書けないので、住所も氏名もわたしがさし出した紙きれに書けないというのだ。あいにくなことに金さんは問答をしているあいだに社での用事を思い出して帰ってしまった。キムチをもらったので、それでここの用事がすんだと考えたのかも知れない。そんな失礼なことを一瞬考えたのも困りはてたからだが、ワイワイガヤガヤ、そのうち、誰かが何とかさんなら「ロスケ」の文字が書けるかな、と言い出し、その何とかさんなる女性（は中年の女性であった）が連れて来られて、彼女が「ロスケ」の文字を思い出ししながらのろのろと書いた。もつともこつちは「ロスケ」の文字がろくすっぽ読めないと来ている。しかし、なんとか見当はつくし、あとで誰かにローマ字に書きなおしてもらえばよいだろう。そうハラを決めて「ロ

スケ」の文字の紙きれをポケットにありがたくおさめたが、とたんにまた何やらなつかしげな気持ちで思い出したのが「人生の同行者」の老オモニのことだ。彼女も彼女のナムピョンも文字が書けない。日本文字が読み書きできないだけではない。彼女らのことばの文字も読み書きできないのだ。（オモニやな、ほんまに）わたしはあらためて思い、彼女に無性に会いたくなつた。

\*アツパツパ……私の子供のとき、年配の女性たちは夏はキモノでは暑いので、洋服、あるいは、それらしきものを着たものだ。洋服と言うよりは、ハワイのムームーのとき、いや、もつと端的に言うて、ネマキのごときワンピースである。それが「アツパツパ」だが（語源は知らぬ）、パナマだったかどうかだったか、いつかカリブ海に面する国へ行ったら、女性は若いのもふくめて、みんなまさに「アツパツパ」のいでたちでいるので、奇妙になつかしかった。「アツパツパ」と言つても判らぬと若い編集者が言い出したので、ここに長く注をつけた。



## ヤクジャと思想家<sup>ササンガ</sup>

一

オモニは、はじめ、わたしが彼女の娘の、わたしの「人生の同行者」を売り飛ばすのではないかとおそれていたらしい。そう「人生の同行者」が言うので、どうもそれはたしかなことのようなのだ。

どうしてそう考えたか。原因は、どうやら、わたしの上衣の肘ひじの革の肘当てであつたらしい。いや、もうひとつあつたかも知れない。これは、「人生の同行者」がいつも言うのだが、わたしの人相のよくなさ。だいたい、わたしはこわい顔をしているらしい。それに、からだも大きい。旅行していて、「作家」などという「インテリ稼業」に見られたことは、まず皆無だ。よく言つて、カラテ、柔道の先生。わるく言つて、ヤクザ。××組の老親分、あるいは、そのなれのはてか。

外国では、よくカラテ、柔道の先生に見られる。これはなかなか便利なことで、わたしにわるいやつはあまり近づいて来ない。何かえたいの知れない技で投げ飛ばされたいへんだと思うのかも知れない。日本でも、こんなことがあつた。まだ羽田に国際線の飛行機が着いていたころだつた。モスクワから帰つて来て、タクシーに乗ると、「このたびはご苦労さんでした」と運転手氏が言う。あれは韓国の反体制の詩人金芝河キムジハ氏に「ロータス」賞をとるためにモスクワで開かれたアジア・アフリカ作家会議に出て、苦勞して彼に「ロータス」賞が行くようにしたときだつたかと思う。そんなこと

を運転手氏を知っているはずもないが、ひよつとしてという気もして、「ウンウン」とおうようにうなずいていたが、やはり、話がどうもおかしい。聞いているうちに判ったのは、モスクワでレスリングの世界大会か何かが開かれていたのだ。まさか運転手氏はわたしを選手だとまちがえたのではなかったが、どうやら、選手OB、今は監督さんというぐあいにとつたらしかった。

ヤクザにからまれたことはよくある。それも、どうやら、同業者としてからんで来るみたいだ。いつか、電車でむつかしい顔をして外を見ていたら、まえにいたヤクザ（もしくは、老チンピラか）が、「おい、兄ちゃん、何でそんなこわい顔してにらんどるんや」とからんで来たことがあった。「兄ちゃん」と言われても、わたしのほうがはるかに年上の「兄ちゃん」である。「アホウめ、おんどれ、わいのことをいくつやと思うてるねん」とすぐむか、「若い、兄さん、若う見てくれて、ありがとさん」とやさしく出るか、どちらにするかと一瞬真面目に考えたが、アホらしくてやめにした。放っておくことにしてあいかわらず窓の外を見ながら、世界の行く末についてこわい顔をして考え込んでいたら、相手はどこかへ行ってしまった。

いっしょにくらすなら、とにかく会って面通ししておかなくては——とあって、オモニ、アボジと会つての顛末は、いや、オモニの心のなかでの危惧は、まさしく、「あの日本人、ヤクジヤとちがうか」であった。

「ヤクジヤ」は、もちろん、ヤクザのことだ。消息通の話によると、ヤクザはヤクシヤとなつて、すでにすくなくとも韓国にあつては今は韓国語としてその語彙のなかに入っているそうだが、国籍は世に言う「韓国籍」で、濟州島にも養子一家を訪ねて何度か最近にも行っている彼女のはその韓国語と

してのヤクシャとは、どうやらちがうようだ。あくまで自まえ、手づくりの「オモニ語」としてのヤクジャであつて、さて、この日本人イルボンサラムのヤクジャ、何をするのか、自分のかわいい娘をたぶらかして「人買い」の手に売り飛ばしてしまうのか。

このわたしニヤクジャ観は、ひとえに、わたしの上衣の肘当てとこわい人相のせいであつたと「人生の同行者」は言う。

革の肘当てについて、ここでわたしの名譽のために一言しておく、わたしは何も上衣の肘が破れたからそこに肘当てをあてがつたのではないのだ。お洒落しゃれな人が、最初から上衣に肘当てをつけている——そういうたぐいのものとしてわたしは上衣を買い、それをオモニ、アボジへの面通しの席に着て行つた。こちらとしては十分に金持ち紳士のお洒落のつもりであつたのだが、彼女たちには、わたしは破れた上衣を買い替えるお金もない男のように見えた。それはあとで知つたことだが、まず、アボジの反応は、

「お金あるか、なかつたら、やるで。」  
であつた。

このみごとにセリフを、大キャバレエの経営者でもパチンコ屋の店主でもない、今や無職で辛うじて食っているアボジが言つたのだから世話はないが、これは、やはり、男の意地のセリフである以上にわたしの「窮状」を憐れんべのことばであつたにちがいない。それが、アボジのわたしに対する最初のことば——親愛を表明することばだつた。

オモニは何にも言わなかつたが、そのとき内心で、この金に縁がなさそうな男、いや、ない男、面

がまえもよくない、これは、やはり、ヤクジャだ、この日本人イルボンサラムのヤクジャ、うちのかわいい娘をたぶらかしてどこかに売り飛ばすつもりやな、と思っていたというのだから世話はない。

一一

ここでわたしの名誉回復なつたのは、わたしと別れたあと、オモニのヤクジャうんぬんの疑念の表明を受けて、当のヤクジャのつきあい相手である彼女の娘が、あの人はああ見えても——と懸命に弁明あいつとめたからである。あとで、わたしのそのころのつきあい相手、今の「人生の同行者」が語つたところによると、彼女はオモニを説得するためにいろんなことを言つたが、いちばんきいたのは、あの人はああ見えても、ほんとうは「思想家ササンガ」である、という一言であつた。いや、さらにもう一言つけ加えたのもきいていたのかも知れない。

「ウエハラボジ（母方の祖父）みたいに。」

ここで字も読めないオモニのようなチマタの人のあいだで、「思想家」というような大それたことばが出て来たことにおどろかないでいただきたい。まず、はじめにことわっておきたいのは、この「思想家」ということば——そのことばを口にする人の大半がオモニをふくめていかめしい三字の漢字を知っているはずがないので、ここは、やはり、「ササンガ」と書いておきたいのだが、「ササンガ」ということばが、朝鮮の場合、日本でのように決して「インテリ」ことばではないことだ。そして、こうしたことばがチマタの人のあいだでも使われているということとは、そのことばで言いあらわされる人間存在が人びとの心のなかに確固としてあるということだが、それがどんな人間存在であつたかと

言えば、たとえば、オモニの父親——わたしの「人生の同行者」のウエハラボジのような人物だった。彼はべつに歴史に残る高名な人物であつたわけではない。また、本を書いたわけでもないし、どこかの大学（もちろん、そんなものが当時あつたとしての話だが）で教えていたわけでもない。いや、もうひとつ、朝鮮社会にかかわる特殊事情として、昔の朝鮮社会の「インテリ」の要件としてあつたような「両班」<sup>ヤンバン</sup>の家柄の出でさえなかつたこともここで言っておこう。ただ、彼は本をたくさん読み、識見のあることを口にしたから、おのずと人びとの尊敬が彼に集まり、じゃあ、あの人の話を聞くかと、人びとが米やら海の幸やらを持って訪れるようになって、自然に彼の家は当時チマタによくあつた「書堂」<sup>ソンドン</sup>になつた。「書堂」は日本風に言うなら寺子屋——と言うよりは、塾だろう。もちろん、どこかのもの判りのよいお殿様が領内の学術振興のためにおつくりになつたありがたい塾ではない。チマタの人が勝手につくつた、つくり上げた私塾で、私学校である。そういうたぐいのものが、昔、日本にもあつたが、朝鮮にもあつた。いや、たぶん、朝鮮のほうがはるかに数多くあつた。

わたしがそう言うのは、日本のチマタの人にくらべて朝鮮のチマタの人のほうが「ササンガ」に親しみを持ち、また彼らを尊敬する度合いがはるかに強いからである。第一、「ササンガ」は、朝鮮にあつては、「インテリ」ことばではなく、チマタの人のことばだ。そして、そのことばに——ことばが言いあらわす人間存在に畏敬<sup>いけい</sup>の気持ちを持っている。たとえば、わが村に本ばかり読んでいるいっふう変わった男がいる。そういう男を、キチガイ扱ひする度合いは日本の村落においてのほうが朝鮮の村落よりはるかに大きいにちがいないし、また逆に彼を「ササンガ」として尊敬する度合い、あるいは可能性は朝鮮の村落において比較にならないほど大きいだろう。その「ササンガ」尊重の朝鮮の村落

においてキチガイ扱いきれずに、逆に「ササンガ」として生きていたのが、まぎれもなくオモニの  
ボジだった。

三

オモニはいまだにそのアボジの写真を持っている。二枚持っていて、どつちもセピア色の——印画  
にしたときの水洗いの不足で自然にそうなってしまったのか、古びた写真だが、小さいほうの一枚の  
は古風にチョンマゲを頭の上のせたアボジで、もう一枚大きく引き伸ばしたほうのはチョンマゲな  
しの彼である。どちらも朝鮮服を着ていて、彼はそのとき五十歳代であったのだろうか、おもなが面長の顔は、  
どちらも聡明で、そうめい威厳がある。たしかに「ササンガ」の風貌であるが、オモニは二枚を後生大事に今  
日まで持ちつづけて来ている。「キミガヨ丸」で来たとき持つて来たのかと訊ねると、そのときの若  
い女性に立ち返ったようにオモニは「そやで。おかあちゃん、イッショケンメイに持つて来たんやで」  
と若返った表情と声とで応じる。ときどきオモニは自分のことを「おかあちゃん」と言い、それはわ  
たしが「オモニ」と呼びかけるときに奇妙な対照をかたちづくる。日本人が「オモニ」と言つて、朝  
鮮人が「おかあちゃん」で応じるのだから。

オモニのアボジがどんな本を読んでいたのか、どんなことを村人にしゃべっていたのかは、勉強す  
るのがいやで、小さいときから済州島の女性の仕事として古来から有名な海女あまになつて海にもぐつて  
いたから、字もおぼえなかつたというオモニに訊ねてもまったく要領を得ない。ついでのことに言つ  
ておくと、オモニのこの「勉強するのがいやで海女の仕事をしていた」うんぬんのことばは、そうで

もしないと一家がメシが食えなかったというふうにもとれる。そのへんの事情はチリバラチリバラ（これは朝鮮語ではない。オモニのは日本語——いや、あとで説明する「オモニ語」である）のオモニの話を聞いていてはよく判らないが、はつきりしているのは、オモニがキミガヨ丸に乗って日本にやって来たのは——すくなくともその最初の最初は、アボジが持っていたなけなしのタンポを売って費用を捻出して、大阪の大学病院にやって来たのについて来たときだ。

そのときの少女「オモニ」の眼にうつった大阪の印象は、それは彼女の大学病院での印象によって代表されると思うが、すべてがピカピカに輝いて見えた。彼女をまずおどろかせたのは、病院の看護婦さんたちが全員まっ白、ピカピカに輝く制服を身につけていたことだし、そこらにおいてあった器具もピカピカに輝く。そして、もうひとつ、栓をひねったら水が出て来たこと。

「ササンガ」アボジは、たぶんガンであったのではないかと思うのだが、胃病で手術を受けるためになけなしのタンポを売って病院に来ていたのだ。「両班」<sup>ヤンバン</sup>でもない家柄でタンポを持っていたりしていたのは「ササンガ」アボジのオモニがなかなかの才覚の持ち主であったからだとなわがオモニは言うのであるが、もうひとつ、日本人としてのわたしは、「ササンガ」アボジは大インテリの「ササンガ」であったればこそ、人びとが字が読めないのにつけ込んで無法に土地を取り上げた日本政府の策謀をはねのけることができたのではないかとここで考えたりするのだ。

オモニの話では、どうやら「ササンガ」アボジは日本語はまったくできなかったようだ。それで、大阪でどのように用を足したかと言うと、漢字、漢文を通じてであった。つまり、筆談であった。店に入って、やおら紙に漢字を書いて示すのである。そのときにはまだ「ササンガ」アボジはチョンマ

ゲを頭にのせていたし、服装はもちろん朝鮮のものだったから、彼が店に入って来るだけでも店の人はおどろいたにちがいないが、顔はいかにもおごそかな「ササンガ」面をしている。そして、その人物、突然紙に達筆で注文を書いてみせるのだから、さぞたまげたことだろう。交番の巡査までが「ササンガ」アボジには尊敬の挙動を示した——とオモニは言うのだが、わたしはそういう「ササンガ」アボジの話をするときのオモニの顔を見るのが大好きだ。オモニは、ほんとうにそのときのアボジを見ているような畏敬と誇りに満ちた顔をするのだが、畏敬と誇りはアボジ個人にむけられたものであるとともに、自分がぞくする「朝鮮」（のもろもろ。それをまとめ上げての「朝鮮」）にむけられたものであるように見える。

#### 四

昔の日本人はいざ知らず、今の日本人は、どうやら「思想」なんてものには何の価値も見出してないのかも知れない。いや、それはそもそも昔ながらのことで、「思想」にかかわつての日本人の心の動きを考えてみると、あんなものには何の力もない。したがって、価値はない。ゆえに尊敬するどころか、思想の持ち主、つまり「思想家」を軽視、無視どころか、軽蔑、あるいはキチガイあつかいする。たとえば、自分の村に本ばかり読んで、何やらわけの判らないことを言っている人間がいるとする。その人物を見る村人の眼は、さしずめ役立たずの能なしを見る眼か、そうでなかったら、まづ頭のぐあいがおかしくなったかわいそうな男だということになるにちがいない。金輪際、あの人、「ササンガ」ということにはならないだろう。しかし、もちろん、この人物が何をかくそう、どこかの



学の先生であつたとすると、たちまち、あれはえらい人だということになる。

ここで少し脱線しておく、世には大学教授であつて「思想家」でない人は山といふ。いや、そつちのほうがあつた。いつかインド人の友人の小説家が日本に来たとき、わたしは彼を知り合ひの大学教授に会わせようとした。彼、即座に言つてのけた。「そいつはただの教授かね、それとも知識人か」これには参つた。彼のその「知識人」ということば、オモニ流になおして言えば「ササンガ」だ。

「昭和」の何年かに芥川賞の候補になつた金史良キムサリヤンが書いた作品に、キイセン 妓生と彼女の息子を主人公にした大衆小説がある。お母さんが妓生キイセン（日本で言う芸者だ）をしながら健気けなげに利発な少年の息子を育てるというよくある筋書きの話だが、なかに、お母さんが息子に、大きくなつたら、何になりたいかを訊ねる場面がある。利発な少年の答えは簡単、「ササンガになります」。では、なぜ、なるのか。「思想はトラにも勝ちます」。

言うまでもなく、朝鮮はかつてトラが猛威をふるつた土地だ。トラがもつとも凶暴で、力ある存在だつたと見てよいだろう。そのもつとも凶暴で、力ある存在のトラに勝つ。――

日本人には、そんな考え方はないだろう。思想はいつでも力弱くて、風にそよぐアシのようなものであつて、だから、強権の発動、あるいは流行によつて簡単に「転向」できるのだ。世の中で力あるものは、権力、金力、武力であり、それを手中にした者であつて、「思想」なんてものには、その思想を持つ、それしか持つものない「ササンガ」なんて人間には何の力もない。これは早い話、日本の学生運動と韓国の学生運動をくらべてみるとはつきりする。日本の学生運動でばらまかれるピラには、難解で、ひとりよがり、何を書いてあるのか判らないのが多い。どだい、ピラの文章の力、「思

想」の力によつて、人を動かそうとする気持ちなどないようだ。韓国の学生運動のはちがう。彼らはピラの文章の力によつて、人びとに訴え、動かそうとする。彼らは「思想」の力を信じる。

しかし、よく考えてみると、「思想」には力がない、「ササンガ」は無力な「弱者」だ——という日本人の考え方は、世界全体から見ると、かえつて特殊であるにちがいない。ヨーロッパにおいても、他のどこの地域においても、日本でのように「文弱」の考え方はない。逆に、そこにあるのは「文強」の考え方だ。日本人のほうが、朝鮮人よりもはるかに世界の「常識」から外れている。——

さて、オモニである。オモニも、そこで世界の「常識」人だ。「思想」には力があり、「ササンガ」は強い。そこへもつて来て、人格高潔、品性、志高く、知識、理想あつて——となれば、娘のつれあいとして申し分ない。いや、まあ、仕方がない。すくなくとも、ヤクジャではない、かわいい娘を売り飛ばすことはないだろう。

ここでわがオモニ、わたしに根源的なことを訊ねて来た。彼女の娘であるところの、わが「人生の同行者」にいくら訊ねても笑つて答えないので、わたしへの質問になつたということだが、「オダさん、なんで、オダさんは、うちのかわいい娘にジョンドウロしたんや」。

このオモニのことばがまず判らぬ。あれこれ言いあつているうちに、こいつは、「ジョンドウロ」という朝鮮語と「したんや」の日本語、いや大阪ことばの合成であることが判つたが、この「ジョンドウロ」とは何か。「人生の同行者」によると、「ジョン」は「情」である。「ドウロ」は「入る」だ。

二つあわせて、つまり、「情が入る」。これはなかなかいいことばだ。

「オモニ、言いたいことは、まず、二つあるな。」

とわたしは言った。まず、その質問は、「なんで、うちのかわいい娘はオダさんにジヨンドウロしたんや」と言いなおすべきであること。ついで、「それはさつきから言うてきたやろ。思想がそこにからんどるんや」。

オモニは言った。

「そんなことウソや。ナムニヨガネヌン、チヨナウイ、ハビマジヤヤジ。」

前半は、まさに凶星かも知れなかつたが、後半は何か。「人生の同行者」が笑いながら訳した。

「男女間には天下の合があわんといかん。」

そこで「合があつた」のである。

これはまさに人生の同行関係がよろしいということだ。それゆえ、わたしはこの「合」よろしき相手を「人生の同行者」と呼ぶことに決めた。

さて、わたしと彼女の年のちがいである。

オモニはわたしについて彼女に言ったそうである。

「えらい年寄りやなあ。そやけど、年寄りにはチエがあるがな。おまえはチエがすぎやから、合あうか判らんな。」

「わたしもチエがあるからちようどいい。」

これは彼女がオモニに言ったことばだ。

わたしはオモニに言った。

「朝鮮では、十年経つと山河が変わるそうやけど、十年が二度経つと、山河が二回変わるから、それは山河のちがいがいなどどうでもええようになったということや。つまり、二人は似たような年になったということや。彼女が若ければ、わたしは年をとつても若い。わたしが年寄りなら、彼女は若くてもチエがついている。」

オダさん、うまいことを言う、とオモニは笑つたが、そんなことウソや、とは言わなかつた。

それでもオモニは、娘とわたしとの一件を聞いたとき、夢見がわるかつたので、占いをやっているオモニと同民族の老人のところへ、二人の運命バルチャを見てもらいに行った。結果は、わたしは「水」である。彼女は「泉」である。

「水」は「泉」からわき出、また「泉」に戻る。「合ハゲ」はよろしい。しかし、この話、よく考えてみると、主導権はすべて「泉」にあるということではないか。オモニが気に入ったのは、そのことではなかつたか。メデタシ、メデタシ。

## 「オモニ語」と「アボジ語」

一

オモニの使うことばは面白い。わたしはひそかに「オモニ語」と呼んでいる。日本語でもないし、たぶん、朝鮮語でもないのかも知れない。いや、それでいて、日本語であり、朝鮮語だ。

どういうことばかと言うと、これは、日本語、朝鮮語二つをしゃべる（ときどきおかしくなるが）わたしの「人生の同行者」の場合とくらべて考えてみるとはつきりする。「人生の同行者」の場合は、簡単に言ってしまうと、頭のなかに字引が、日本語、朝鮮語それぞれ一冊ずつある。たとえば、机は「ツクエ」「チェクサン」、椅子は「イス」「コルサン」というぐあいにそれぞれひとつあて対応する日本語、朝鮮語が頭のなかにしまい込まれていて、日本語をしゃべるときには前者、朝鮮語をしゃべるときには後者——というぐあいに字引から出て来る。そして、そのとき、どちらか一方の字引は閉じられたままになっている。

オモニの場合はどうか。これも簡単に言ってしまうえば、要するに字引は一冊しかないのだ。もとは朝鮮語の字引一冊しかなくて、それを頭のなかに持って大阪まで「クンデワン」あるいは「キミガヨ丸」に乗ってやって来たのだが、そのときから五十数年、日本語はいやおうなしに字引のなかに入り込んで来た。その入り込み方だが。——

アボジの例が端的に示しているように、みんな食えないからやって来たのだ。かたい言い方を使えば、たちまち労働の現場に入ったということになるが、彼女の日本語を聞いていると、なるほど、この人たち、日本語を頭でなくからだでおぼえたのだなという気がつくづくとして来る。日本語でどなられたり、わめかれたり、あるいは、自分からカタコトをブツブツ口にしたりしているあいだに身につけて来た日本語だ。学校で習いおぼえた日本語ではない。

まず、ここでことわっておかなければならないのは、オモニもアボジも字が読めないことだ。カナとか漢字とか、日本で使われている文字が読めないだけではない、朝鮮の文字ハングルも、おそらくろくすっぽ読めない。数字はどうやら判るらしいのは、オモニの手帳、あるいは、それらしきものに娘たちの電話番号の数字がゴチャゴチャと書きつらねてあるからである。もつとも、これは自分で書いたのではない。娘たちが自分で勝手に書き込んでいったものだ。名前も書いてあるが、それは読めない。ただ字のかたちはおぼえていて、あるいは、番号の順番はおぼえていて、それで用を足しているものと見える。

わたしは、ことばの判らない国、字の読めない国に山と行っているので、こういうオモニたちのことのあるようがよく判る。たとえば、アラブ語の世界に行くと、わたしはまったくお手あげになる。ことばはさっぱり判らないし、第一、字がまったく読めない。道を歩くのにも、バスに乗るのにも、道路標識も行き先を記した文字も、すべて判らない文字だから、教えてもらったりおぼえていたりする文字のだいたい形で見当をつけるのだ。実際、オモニもアボジも同じようなことをして、駅の自動販売機で切符を買うときは、文字のかたちで見当をつけてボタンを押しているようだ。

オモニはたしかに最初、朝鮮語——と言うよりは済州島語という字引を一冊、頭のなかに持つて日本にやって来たのだが、五十数年、日本人社会のなかにもまれて来たおかげで、字引は日本語と入りまじったものになってしまった。

具体的に言うくと、「机」は朝鮮語で「チェクサン」として頭のなかにおさまっているのに、「椅子」は「イス」として、日本語として頭のなかにあつて、つまり、「机と椅子」と言おうとするとき、いやおうなしに二つのことばが入りまじつて口から出て来るのだ。そして、日本語と朝鮮語は文法構造がほとんど同じだから、この入りまじりは、ただの単語だけの問題ではなく、文章全体がそっくり入れかわつたり、入れこになつたりして、それで、結局、全体が日本語、朝鮮語、あるいは、済州島語と言うよりは、「オモニ語」としか言いようのないものになる。つまり、頭のなかの字引が、ただ一冊、それも彼女の手づくりのものが頭のなかにでき上がっているのだ。

もちろん、彼女は、頭のなかに自分がすでに手づくりの字引を持つていることを意識しないでいる。わたしは日本人なので、オモニはわたしとしゃべるときは、日本語を使う。すくなくとも、当人はそう思つてしゃべっている。しかし、しゃべることばのなかに朝鮮語、済州島語が入りまじり、オモニ流に言えば、チリパラチリパラとなつて、あれはまさしく「オモニ語」である。そうとしか言いようのないものだ。

朝鮮人としゃべるときはどうか。彼女は、もちろん、朝鮮語でしゃべる。しかし、聞いていると、そこに随所に日本語が入る。あるいは、それらしきものが入つて、こちらも「オモニ語」である。いつのまにか、そうなつてしまつている。

これは何もわが家のオモニに限ったことではないらしい。「総連」のえらいさんがわたしにいつか言っていた。「祖国」に自分の年老いた母親を連れて行った。相手は金日成氏ではなかったが(そうだったかも知れない。わたしの記憶はさだかでない)、とにかく「祖国」の大えらいさんに彼の老オモニは会うことになった。おばあさんは感激して、その大えらいさんのまえで一世一代の大演説をやつてのけた。自分がいかに苦勞して生きて来たか、また、「祖国」がこんなに立派になつてよかつたと述べたのだが(彼が頼んだのではなかった。彼女が勝手にやつたそうだが、それはよかつたのだが、彼が慌てたのは、おばあさんのしゃべることばが半分ほど日本語であつたことだ。わたしは、なるほど、という気持ちでそのとき彼の話を聞いたのだが、それはわたしがオモニたちに知り合うまえのことだつた。今だつたら、彼の老オモニは半分ほど日本語をしゃべつたとは思わない。それは彼女の「オモニ語」を話したのだ。その「オモニ語」を、彼女もまた、学校で習つてつুকつたのではなかつただらう。からだで、手をつুকつた、まさに手づくりだ。

二

わがオモニの「オモニ語」の実例を少しあげてみよう。

「うちの近くにガス・タンク・エメ(横に)チブ(家)があつたから、ケイボ団ドゥリオラン(警防団たちが来て)はよはよソカイセ言うて、アボジが田舎へ探しに行つて、見つかつたのが今の家や。高<sup>タカ</sup>取山エメ(横に)クンクナン(大きな大きな)防空壕に行つたら、フングランフングラン(ゆれにゆれた)



したから、びつくりして出て来たら、高取山がゆれとった。地震やと思うたら、パクタンやった。ケイボ団は大ヘンタイ（編隊）が来る言つたけど、パクタン落とせへんと言うたから、地震やと思うた。びつくりして上見たら、アイゴ、電信柱に人とフトンがひっかかっていた。……」

今のがオモニの戦争体験だが、さて、「戦後」は。――

「チバネイスミヨン（家にいたら）、ゴウツハヌンソリエ（ゴウツと音がした）、びつくりして戸を開けたら、ムリ（水が）ワアツと入つて来たと思たら、タタミがプカプカ浮くのんを足でパンパン踏んでも踏んでも浮いて来よるねん。フトンも何もかも浮いて来よるねん。便所の中身もプカプカ浮いた……。」「

「ウンコが浮いたんか。」（とこれはわたし）「（恥ずかしそうに笑い出して、うなずいた）イヌもネコもみんなプカプカ浮いて、流れて来よるねん。うちはヒラヤで上がるとこもないし、ホリカジ（腰まで）ムリオルワソ（水が上がって来て）、うちら、死んだかと思うた。……」

今のは戦後、彼女が住む長田区ながたなど神戸の西部を襲った水害のときの話だ。

それでは、彼女の「戦前」は――

「イルボン（日本）に来たけど、ミツキ、ヨツキ、働くとこあらへん。パヌファ（半靴。雨靴のことか？）つくる工場、知り合いがやつてたから、パヌファ縫う仕事しとんねん。十二足で一ダースや。それで五銭や。チャルハヌンサラムン（上手な人は）オヤカタに五円貰うてたけど、うちらはアカンねん。なかなかでけへんねん。そやからモンモゴソ（食べられへん）。」

「オモニ語」のひとつの特徴は、表現がきわめて直截ちよくせつ簡明であることで、そのゆえか、ものごとの本質をついている。たとえば、今、あげた例のなかに出て来た「オヤカタ」である。わたしは彼女の

その言い方をこよなく愛しているのだが、アボジが雇われた土木工事の何とか組の現場監督から、会社の係長、課長から社長まで、すべて「長」と下に付くような役職についているご仁じんはすべて「オヤカタ」である。たとえば、知り合いの息子さんと、「××電機」に勤めているのが、今度「オヤカタ」といつしよに美国ミイグ（アメリカ合州国）に出張に行った——というぐあいである。わたしも「人生の同行者」もこのオモニの言い方を愛していて、今やひそかにこのことばでいろんなご仁を呼ぶことにしている。たとえば、「この政府のオヤカタ、しようがないね」あるいは、「日本のオヤカタがアメリカのオヤカタに会いに行つた」。

もつとも、こういうとき、やはり、オモニは、今や、「君主国」日本の市民ではなく、レッキとした「共和国」韓国の市民である。「大統領」は「大統領」と言う。「日本の大統領」がどうした、こうしたと言うので、ヘエ、日本にそんな存在があつたのかと思つたが、それは総理大臣のことだつた。天皇？——彼女たちにとつて、そんなメンヨーな存在はねつからなかつたものだろう。

## 二

ついでに「アボジ語」のことも言っておきたい。

アボジはわたしのことを「オダ君」という呼び方で呼ぶ。オモニは「オダさん」という呼び方をするが、アボジは断乎だんことして「オダ君」だ。この呼び方を耳にするたびに、わたしはわたしの父親のことを思い出す。それは、彼もアボジと同じような言い方、つまり、人のことを「××君」という呼び方でよく呼んでいたからだ。

今はこの呼び方は、大人の世界から消え去って子どもの世界だけで使われているみたいだが、昔はよく大人が使っていた。今でも議会のなかでは、「××君」という呼び方でおたがいを呼びあつている。すくなくとも「公的」にはそうであつて、テレビジョンの画面で何とか委員会の場面が出てくると、そこで委員長が「××君」といかめしく呼んでいるのが眼に入つて来る、いや、耳に入つて来るにちがいない。

この議会の「公的」な場での「××君」という呼び方は、おたがいを対等、平等の存在としてみなしての呼び方だろうと思う。そして、昔はこの呼び方がかなり一般の世界にもひろがっていたのではないか。たとえば、わたしの父親などがその呼び方で人を呼んでいた。いや、世の中の風潮大きく変わつて、戦後は、だいたいが「××さん」の呼び方になつてしまった。父親のほうも、その風潮に自然とまき込まれてしまったのか「××さん」の呼び方にたいていなくなつてしまつていたが、それでもときどき「××君」を使つていたし、わたしが子どもだったときはあきらかに「××君」だつた。「××君」の呼び方の延長線上に「あの君が……」というような言い方があつたが、彼はよくその言い方もした。そして、当の話し相手に対しては「きみ」である。「きみ」に対して「ぼく」——わたしは父親からそういう言い方を何度も聞いた。

この「××君」が「××さん」になつた世の中の風潮は、どうやら議会のなかにまで及んで、「公」的には議員どうしはいまだに「××君」と呼びあつているようだが、「私」的にはおたがいを「××先生」と呼びあつているみたいだ。おたがいを「××先生」と呼びあう人間関係は、そもそも自分たちを特権階級とみなして、われら人民をとことんバカにしているやり方ではないのか。そして、そう言えば、

わたしがいつもやりきれなく思うのは、学校の教師がおたがいを「××先生」と呼びあっていることだ。こつちも本当にやりきれない。

アボジに話を戻す。アボジの「××君」という呼び方の話だ。これはわたし自身の体験にそくして言うことだが、だいたいにおいて外国人は、自分がやって来てつきあいを始めた、そのときのその国、社会のもろもろを身につけると同時に、それをいつまでも持ちつづけるものである。その国、社会の内部にまで深く入り込んでしまえば、その国、社会のもろもろの変化を敏感に身につけて行くだろうが、周辺、外側にいるかぎりは、最初にとにかくガムシヤラにわがものにしたものでやって行く、まにあわせて行く。自分の体験にそくしてそんな気がわたしにはするのだが、アボジの場合がひとつの例だろうと思う。いや、アボジばかりではない。年配の朝鮮人には、アボジのように「××君」という呼び方をしたり、「あの君が……」と言い、「きみ」「ぼく」でしゃべるといった人が多いのだ。それは、彼らが日本にやって来たころの日本——、わたしが生まれた一九三〇年前後、「昭和」のはじめの日本は、こと男たちに関するかぎり、「××君」、「あの君が……」が議会の外にあつてもかなりふつうの呼び方、言い方であつたからだ。

ただ、ここでアボジとオモニとのあいだには、根本的なちがひがあることを書いておきたい。それは、アボジはわたしとしゃべるときは、日本語をしゃべることだ。そして、朝鮮語をしゃべるときには、濟州島語が大きく入りまじつたものであると、彼がしゃべることばは、やはり、朝鮮語だ。男性であつたアボジはオモニにくらべてそれだけ日本の社会の、いかめしい言い方をしてみれば、労働の現

場に深く入り込んでいたからだ。「人生の同行者」は言うのだが、彼女のことばはだいたいにおいてあたっているだろう。アボジのことばは「オダ君」というようないさかさかインテリくさい言い方を除けば、たしかに日本の労働者——それもそれこそ底辺での彼らのいぶきがそのままに感じとれる日本語だ。そして、その日本語を、アボジはやすやすと身につけたのではない。彼の日本語は日本語だが、それは、やはり、朝鮮人の日本語だし、今でも決してらくらくとしゃべってはいない。「人生の同行者」に言わせると、彼はわたしと日本語でしゃべるときには、あきらかに緊張を表情に出しているそうだが言われてみて、なるほどという今さらのような気持ちがする。

こうした意味では、アボジも一種の「アボジ語」をしゃべっていると云っていいかも知れない。実例を少しあげておこう。

「……いちばんサイソ（最初）に来たのはねエ、いもうとの主人の紹介で着物のノリをつくる工場に来たんだがねエ、オダ君、売りに歩いとるんだよ。一日売った分の一割をもうとるんだヨ。（一日）一円売れたときもあつたんだが、だいたいアカナナダ。アハツハツハツ。……それからアブラ工場で仕事したんだがねエ、オダ君、えらい仕事で百二十キロかついで、三階まで上り下りしとつたんだよ。それからが足が弱いんだヨ。……」

今のは彼の「戦前」にかかわつての話である。「戦中」の話は——

「……オダ君、きみも知つとるだろうが、戦争中、ぼくは屋根ウラでアメをつくつとつたんだがねエ、刑事が来て剣で箱をつついたんだね（ここでオモニが「オモニ語」で、アメがキンタン〈全部〉ザアツと出て来てしもたんや、とあいの手を入れる）、そのまま連れて行かれてしもうたんだねエ。三月、みつき入れられて、

えらい殴<sup>なぐ</sup>られて、蹴<sup>け</sup>られて、えらい目におうた、えらい目におうた。……」

オモニによると、この警察の留置場での「拷問」はたいへんなものであつたようだ。アボジは元来が無口と来ている。訊問に対してろくすっぽ答えなかつたものだから、「エライ鮮人」の政治犯に見立てられたものらしい。アボジは「えらい目におうた、えらい目におうた」としか言わないが、三階まで百二十キロの荷物をかつぎ上げるような仕事をやつた頑強なからだの持ち主だつたから死なずにすんだのだとはオモニのことばだ。

さつき書いたオモニの「オモニ語」といい、このアボジの「アボジ語」といい、实例はそのまま彼らの歴史を物語っている。苦難にみちた歴史を、である。

つづきは製品版でお読みください。